

## D紙芝居⑤

### 白山を追われた仏たち ——白山麓の明治維新



#### Visual 白山権現の神々——下山五仏（白峰林西寺蔵）

（前説）白山の山頂には御前の峰に十一面観音、大汝の峰に阿弥陀如来、別山には聖観音らの仏さまたちが白山権現（はくさんごんげん）の神々として祀られていました。明治新政府は古い日本の神さまの信仰に基づく政治の姿にもどそうとします。そこで政府は「仏と神は異なるものである」から二つに分けるようにと、命令を出します。仏教伝来以来千三百年余り、日本人の信仰文化の姿を変えようとするのですから社会は大混乱です。

明治二年（1869）鶴来では白山本宮にあった白山寺が壊され、名前も白山ヒメ神社となります。仏さまは売り払われ、金沢波着寺へ譲られます。

明治五年（1873）5月、江戸幕府の直轄地天領であった白山麓18カ村の村長（むらおさ）らは今まで通り本保県（現在の福井県）に所属したいと希望します。そこで石川県は県の役人であった森田平次に白山麓18カ村の調査を命じます。歴史を詳しく調べた森田平次らの主張に従い、白山と白山麓は200年ぶりに越前（現在の福井県）から石川県に組み入れられます。

明治七年（1875）、明治新政府のかねてからの方針に従い、森田平次らは神官と共に白山山頂と参道である登山道から仏さまを取り払ってしまいます。

現在、尾添白山社・白峰林西寺において大切にされている多くの仏さまは、この時、白山より降ろされた白山権現の神々であった仏さまです。

この物語は、明治政府の政策によって白山を追われた仏さまたちのお話です。この出来事に偶然出くわしたブロードの髪をした異人さん、JJラインと歴史家森田平次との国を超えた交流も描かれています。

\*明治五年12月2日まで旧暦、翌日の明治六年1月1日から新暦となります。

#### （登場人物）

石川県県令（石川県知事） 内田政風（元薩摩藩士）60歳

主人公 / 石川県役人森田平次（元加賀藩歴史学者・古神道平田篤胤学派・曹洞宗）50歳

主人公 / ヨハネス・ユストウス・ライン（JJライン・プロシャ人＝ドイツ人・地理学者（植物学））39歳

通訳 三田侘（さんだただし）20歳代中ほど

準主人公 / 牛首谷村人赤岩利吉（実在、設定は50%架空）30歳代

#### （参考文献）

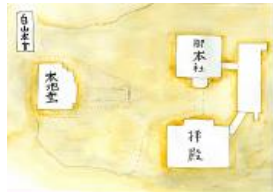
『白山所属争議』森田柿園編／日置兼編、『白峰村史』、『白山行程記』、『石川県災異誌』

「ライン博士（ライン博士と日本）」楠根重和。「白峰と森田柿園」（石川郷土史学会誌 22号）鈴木雅子、「グリフィスと白山」（若越郷土史研究 32巻3号）山下英一

D紙芝居⑤ 白山を追われた仏たち——白山麓の明治維新

| 構成 | Visual | Narration |
|----|--------|-----------|
|----|--------|-----------|

F-1 白山寺破却、  
田畑となる。



白山ヒメ神社神官「明治新政府の命令に従い、仏教がわが国へ伝わる以前の神の国の日本の姿に帰るのじゃ。仏は神ではない。白山本宮境内から白山寺を解体し、土地や仏像仏具は希望（のぞむ）む者に売り払うものとする。これより白山ヒメ神社にもどるのじゃ」

白山ヒメ神社と名を改めた白山本宮の境内から、白山権現の神であった沢山の仏さまが次々と運びだされます。本堂の仏さまは金沢の波着寺に引き取られ、残った仏さまは石川郡内の小さな神社やお寺に引きとられました。仏具は売り払われます。建物も残さず壊され、そのあとは田畑となりました。

F-2 明治五年、県庁が美川へ移転し、  
石川県となる。

美川の県庁県令内田政風「森田君、幕府の領地であった白山麓18カ村の村長（むらおさ）



たちが本保県（現在の福井県）への編入を願いでたらしいと聞いたが、まことか」

内田県令（現在の石川県知事）は県の役人となっていた森田平次に尋ねます。

県役人森田平次「そのようです。急ぎ白山麓のこれまでの歴史を調べ、地形や村人の生の気持ちを確かめようと思います」

牛首村（現在の白峰）の村長（むらおさ）らは本保県（現在の福井県）へ属することを望みます。一方で尾添・荒谷、西谷の村々は、石川県へ入ることを願いました。

森田平次は手間を惜しまず村人の気持ちを聞き歩き、詳しい報告書を作りました。

県令内田政風「森田君、喜ぶが良い。白山麓18カ村は、丸ごと越前から石川県のものとなった。森田君の具体的で詳しい報告書のお蔭である」

内田県令は平次の手をとり大いに喜びました。

明治五年（1873）11月明治政府の判断が下され、200年ぶりに白山麓18カ村が加賀、石川県にもどってきたのです。

F-3 県令内田政風の命により、三所権現解体下山のため白山麓18カ村へ勢子を指示。  
村の真宗道場に集められた村人に、村長（むらおさ）が県の命令を伝える



明治七年（1875）6月15日、「神と仏を分けるように、というかねてからの明治政府の命令を白山山頂一帯でも実施するように」内田県令から白山麓18カ村の村長（むらおさ）らに命令が下ります。

県令内田政風「来る7月1日より山開きの3日間、白山ヒメ神社の氏子である白山麓の村々から人夫150名を差し出し、白山の山頂一帯にある仏像仏具を悉く降ろすように」

明治政府の政策方針であるこの困難な事業を成し遂げるため、県の役人であった森田平次らに一之瀬の温泉場へ出張が命じられます。

白山麓の村々では、夏の農作業を放りだして3日間も人夫をすることに不満でしたが、県からの命令です。出作り小屋で、あわやひえを作っている村人にも声をかけて人数を集めました。牛首村一番の力持ちと評判の赤岩利吉も出作り小屋から呼び戻されます。農作業はやむを得ず中断しますが、それ以上に白山の神として祀られていた山頂一帯の仏さまを壊して、山から降ろすことに恐れおののいていました。

村人は神社の氏子である前に、仏さまを信ずる信心深い浄土真宗の門徒でした。

F-4 暴風雨のため予定を延期していたが、  
登山を決行する



6月から降り続く雨は、7月5日になっても降り止みません。鶴来から神官らを伴って森田平次ら県の役人は一之瀬の温泉場まで来ていましたが、雨の様子を見て白山の登山は7日とします。

7月6日村人を集め一之瀬の登山口でお祓いし、仏さまを山から降ろすわけを丁寧にわかりやすく説明します。

翌日7日午前一時、降り続く雨の中、蓑を付け松明を手にした白山麓の村人が数十名、一之瀬の温泉場に到着します。

役人「この通りの雨模様である。ご苦労だが山に登るのは、雨が上  
ってからにする」

牛首村から連れられてきた村人一同は、蓑を雨に打たせながら  
役人に詰めよります。

牛首の村人「わしらは県令さまの命令に従い、畑仕事を放りだしてやってき  
ましたのです。少しの雨で山登りを延すことはできません」

牛首村人赤岩利吉「お役人さま、わしら野良仕事を止めて、白山権現さまを壊して  
山から降ろす…、この恐ろしい仕事にでかけてきましたのや。  
一刻も早く済ませて野良仕事に戻りたいんや」  
降る雨を衝いて松明をともし、牛首村から一之瀬の温泉場まで  
歩いてやってきた数十名の村人の真剣な眼差しに酔いも覚めた  
か、役人は登山を決意します。

#### F-5 暴風雨。越前禅定道から室堂につく。

##### 御前の峰の仏像を壊す



7日早朝、暗闇の中、一之瀬の温泉場を出発した一行は、登山  
道を進みます。いたるところで雨に濡れる石仏が出迎えてくれ  
ます。音を立てて降り続く雨の中、濃い霧に包まれる山の宿で  
ある室堂にようやくと着きます。

県役人「室堂にある僧泰澄木像、御前の峰の堂にある十一面観音像と阿  
弥陀如来像、これらを解体し山から降ろすのだ」

先導する役人は偉そうに命じます。

村人は、承知しているとはいえ心の動揺は誤魔化せません。村  
人の顔は雨から雪交じりになった天候の寒さばかりでなく、表  
情は固く凍りつき色を失っていました。

動員された村人たちは御前の峰に登り、祀られている2体の仏  
さまの手足を外し、頭を外し、震える手で仏さまをバラバラに  
してゆきます。口々に小さく念仏を称えておりました。風や雪  
交じりの雨に打たれているから寒いのだと自らに言い聞かせ、  
黙々と作業を進めます。昨日まで白山の神々と信じていた仏さ  
まなのでした。

#### F-6 壊した仏像を降ろす



山の天気は村人の心の中を知ったかのように荒れに荒れ、強い  
風と雪交じりの雨は頬を打ちともすれば目を開けていること  
もできません。

森田平次「御前の峰の仏像仏具を何とか室堂まで降ろすのだ。わかったか」  
霰が顔を打ち痛いぐらいです。これでは降ろすのはとても無理だと村人は思いました。  
それでも御前の峰の堂に祀られている2体の仏さまを、先ずは力自慢の数人が室堂まで降ろすと決めます。  
ひとり赤岩利吉だけは風雨の中、手足をもぎ取ってもまだ四十貫（150kg）を越える仏さまを背負って歩きだし、室堂でも立ち止まろうとしません。  
「利吉イ…、利吉や〜い…」との呼びかけにも答えず、濃霧の弥陀ヶ原をひとり降ってゆきます。

赤松利吉「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…、もったいなや、もったいなや…、お許してください。南無阿弥陀仏」  
利吉は呟きながら、そのまま一之瀬まで一息に降ろそうとしていました。利吉には横殴りの雪交じりの雨と風の音しか耳に入りません。  
県の役人と村人らは、身一つで利吉の後を追います。  
午後三時、一行は一之瀬の温泉場に帰り着き、村人は身も心も冷えた体を湯に浸かり温まろうとします。だが、誰一人、口を利くものはいませんでした。

#### F-7① JJラインが一之瀬温泉場にやって来る



8日、まだ雨は降り続けています。昨夜、日本人通訳を伴った小柄なプロシヤ（1871年成立した統一ドイツ）人が一之瀬の温泉場に到着していました。名をJJラインといいます。明治維新を迎えたばかりの日本の物産工芸や植物などの調査をプロシヤ政府から命令を受け、はるばる東洋の果ての日本までやってきたのです。

漆の木の調査や漆工芸品の生産と技術を調べるために、植物の採取、地質や標高の測量なども意欲的に行っていました。JAPANと言われた日本の漆は、当時のヨーロッパでは優れた塗料として知られていました。

秘かに日本国内の社会情勢も調べ上げ、植民地にできないか調査していたのかもしれない。

JJラインと通訳の三田は、温泉場の宿、薩摩屋で雨が止むのを待っていました。しかし雨の晴れる気配はありません。

もてあます時間を温泉で過ごそうと二人は温泉場へ出かけます。  
一之瀬温泉場風呂番「裸で入るとは何事じゃ、定め書が見えんのか」

温泉の湯に浸かろうとして風呂番に叱られます。古くから、この温泉場では丸裸で湯に浸かることを禁じていました。二人ともびっくりです。

見かねた県の役人と森田平次は宿の部屋に招き、お酒や肴でもてなします。谷川で獲れた新鮮な鱒に、JJ ラインはたいそう珍しいと喜びます。

JJ ラインはブロンドの髪を掻きあげながら話し込み、酒も進みます。通訳を通して海外の情報や国内の事情を互いに話し合い、思っても見ない有意義な夜を過ごすのでした。

「7月9日、山の温泉場で雨に閉じ込められもしたが、新しい国の形を整えようとしている事情は、国は違っても通じ合うものがあつた。得がたい特別な時間であつた」と森田平次は日記に書き残しています。

#### F-8 村人を再び説諭する

\*金沢城下、犀川、浅野川の堤防が決壊し洪水が襲う



長雨は6月下旬から止むことなく、29日から7月7日まで大雨が降り続けました。長引く激しい雨は、手取川を氾濫させ多くの田畑を流します。

金沢の犀川と浅野川の堤防も壊れ、城下に洪水被害をもたらします。このときの記録によれば、石川県下の洪水被害は堤防の崩れ363カ所、死者23名、災害にあつた人は5000人を越えました。

金沢城下の人々「白山の仏さんを壊すからや。そのうえ無理やり山から降ろすから、天罰仏罰があつたんや」と金沢城下の人々はうわさし、穏やかでない空気は瞬く間に広まります。うわさはすぐに白山麓18カ村の村人の耳にも入ります。

森田平次「そのような根も葉もないうわさを信じるではない。天罰など当たるはずがない。明日朝、神事を執り行い、御払いもしよう。みなみな心配することはない、白山の神さんはお前たちを見はなしたりはしないぞ」

根気よく何度も子供のようになだめ、村人を説得します。

F-9 プロシヤ人、登山する。

御前の峰=堂内の台座に一面の鏡がある

7月11日、JJラインは、いつまでも続く雨だれの落ちる音に耳をそばだてながら言います。

JJライン「三田さん、私にも蓑をください。雨が上がるのを待つのはもうたくさんです。これくらいの雨でしたら登りましょう」



JJラインは三田通訳に向かって、どうしても白山に登るのだと決意を伝えます。

午前1時、JJラインは三田通訳を伴って登山を開始します。雇った人夫に測量機器を持たせ、小さなキャラバン隊を組んでいました。当時、日本の山では、登山といえば足もとは草鞋履きでした。その日も日本人は全員草鞋履きです。JJラインは革の靴を履き、背中にはランドセル、毛織物の背広姿です。

ようやく登り着いた室堂の内部には、御前の峰から壊して降ろしたキラキラした仏像が手足をもがれ無造作に積み上げられています。頂の御前の峰の堂はもぬけの空、二体の仏像は取り払われ、台座の上にポツンと一面の鏡が置かれていました。

森田平次の提出した報告書によれば、頂上の高さは海拔八千四百尺(約2545m)と持参した高度計が示していたそうです。

2702mが白山の標高です。ずいぶん正確に測量されたようです。

F-10 プロシヤ人、一之瀬の温泉場を発つ。

晴れ上がった空、JJラインと森田平次のわかれ

12日、晴れ。皮肉なことに、JJラインが一之瀬の温泉場を離れるときになって空はからりと晴れ上がります。

JJライン「金沢を経て越中立山も登り調査する予定です。森田さん、とても興味深いお話ができました」



JJラインは、森田平次に別れのあいさつをして旅立ちます。

牛首村を抜け、雨で崩れた崖の前を通ったとき、植物の化石をひとつ拾いあげます。帰国して持ち帰った化石を調べると恐竜の生きていた白亜紀の化石でした。後日、「桑島の化石壁」と名付けられたこの地の大発見は「日本地質学の発祥の地」として歴史にその名を刻みます。

F-11 直会 (なおりい)。

ふるまわれた御神酒に酔い舞い踊る村人



12日夜10時晴れ、村人70名余りを率い森田平次は、再び白山登山を試みます。沢山の松明を灯し、光の列が山頂を目指します。晴れあがった天気を幸いに、別山、大汝の峰の仏さまを解体し、5日前、雪交じりの風雨の中、室堂まで降ろしていた仏さまもまとめて一之瀬まで降ろそうとします。

バラバラにされた仏さまは一之瀬温泉場の薬師堂に入れられ、人目に触れないよう封印されました。

14日、村人が集められ、固く閉じられた薬師堂を前に御払いが行われます。

集まった村人に御神酒（おみき）をふるまい、紅白の餅が配られます。たらふくふるまわれた御神酒に、酔いに任せて舞い踊る村人や赤岩利吉の姿がありました。

県役人「村人も納得しておるようじゃ。森田君、利吉とかいったか、あの力持ちの百姓も踊っておるぞ」

苦渋を浮かべながらも踊る利吉の姿に森田平次もほっと胸をなでおろすのでした。

白山山頂周辺から仏像、仏具が悉く取り払われました。登山道には、頭の割られた石仏がわずかに残されるだけでした。何ごともなかったかのように山の風が吹き抜けてゆきます。

F-12 下山仏、県より買い取り、林西寺に安置

村人の思い、願いを入れて牛首村林西寺の住職が、白山から降ろされた仏像を買い取りたいと県へ願い出ます。

県役人「一之瀬まで降ろした仏像のことは、願い出の通り牛首村林西寺へ下げ渡すものとする」



仏具は売り払い、一連の下山仏の費用に充てることとし、これ以上の混乱を招くことを恐れた県は、時間を置かず仏像を下げ渡すことを許します。



このように、明治維新により、白山山頂を追われた仏さまは「白山下山仏」として、今も白山市白峰の林西寺で大切に護られています。

もう一つの白山登山道、加賀禪定道にあった檜新（神）宮から降ろされた仏さまも、白山市尾添の人達によって特別に設けられた白山社に納められ「白山下山仏」として大事に伝えられています。

明治新政府の命令であっても白山麓18カ村の村人には、昨日まで白山の神と仰ぎ、信仰していた仏さまを壊して捨てるなど到底できることではありませんでした。